カトリック
広島教区報

No. 115
カトリック
広島司教区

発行責任者
広報担当
服部大介神父

「点訳版」あります。
お問い合わせください。

広島市中区幟町 4-42
広島司教館内
TEL（082）221-6017

「出向いて行く教会」を目指して

広島教区長　アレキシオ　白浜　満　司教

主の降誕と初春のお喜びを申し上げ、広島教区の皆さんの上に、神様の豊かな祝福をお祈りいたします。

白浜満司教と教皇フランシスコ（2018年9月8日、バチカン）

年末の種々の報道によって、教皇フランシスコの来日が現実味を帯びてきた感があります。この歴史的な出来事の実現を祈りつつ、世界平和のため、また、今後の広島教区の歩みのため、教皇フランシスコの来日を、神の恵みの追い風として生かしていくことができれば幸いです。そのためにも、わたしたちは、教皇フランシスコが、二〇一九年十月を「福音宣教のための特別月間」に設定されたことを心にとめたいと思います。

「特別月間」の目的

百年前、当時の教皇ベネディクト十五世は、教会の宣教活動の目的を再確認し、新たな推進力を加えようとして使徒的書簡『マキシムム・イルド』を発布されました。この使徒的書簡の重要な意義について、教皇フランシスコは、次のように述べています。「悲劇的な世界大戦後の一九一九年、教皇は、世界における宣教活動から植民地主義的な要素を消し去り、破壊をもたらす国家主義や拡張政策主義を退けるために、全世界の宣教活動をさらに福音に即したものとする必要があることを認識しました。教皇は『神の教会は普遍的です。教会はどの民とも対立しません』と記し、あらゆる種類の利害関係を拒むよう強く求めました。聖なる生活と善行を通して、主イエスがより広く告知され、イエスの愛が広まることこそが、宣教活動の目的です。このようにベネディクト十五世は、当時の概念と言葉づかいを用いて、『諸国民への宣教』をとりわけ強調しました。」

皆さんもご存じのように、毎年十月の最後から二番目の主日は「世界宣教の日」と定められています。これに関連して、教皇フラ

司教メッセージ・じゃけえのう・教区の動き　一～四面
ファティマ巡礼　五面
災害サポートセンター・世界平和記念聖堂関連　六～七面
J―CaRM・教区内の行事案内　八～九面
地区・海峡からの風・一粒会・青少年・ひと粒　十～十二面

じゃけえのう

「じゃけえのう」とは広島弁で「だからね！」という意味。

彦島教会では、毎週水曜日に聖書を使った分かち合いをするグループがあります。集まるのは五人から八人ぐらいの信徒だけの小さな集まりです。これまでは次の週の「聖書と典礼」を読んで分かち合いをしていましたが、教区から聖書の通読と写経の勧めがありましたので、通読をすることにしました。

一人が一章のペースで音読し、交代で八章程度読むと一時間ぐらいかかります。旧約聖書から始めたのですが、内容に戸惑いを感じることも少なくありません。創世記では、登場人物の名前を読むのに苦労し、出エジプト記では、幕屋建設や奉げ物の細かい指示を読むのに疲れました。レビ記や民数記では食べ物や皮膚病などの話も出てきます。現在、申命記まで進んでいますが、律法の部分では、現在の常識では理解できないような記述も多いように思われます。特に戦争や死刑の記述では、現在のカトリック教会の主張と全く異なる記述があり、どのように理解したらよいか分かりません。よいアドバイスがあればお願いします。

個々の記述には理解できないところもありますが、誰もやめたいとは言いません。聖書の全体の流れは、通読でしか分からないと思って続けています。全体を読み終えたときには、単に聖書に対する理解が深まるだけでなく、キリスト教の信仰に対する理解も深まると信じて、根気強く続けていくつもりです。

（彦島教会　福永 孝章（よしあき））

ンシスコは、使徒的書簡『マキシムム・イルド』の発布から百周年に当たる二〇一九年の十一月ではなく十月を、「福音宣教のための特別月間」にすることを意図されました。それは、歴史的な事情の相違はあっても、教会の福音宣教の活動に、新たな熱意と推進力を加えたいという意向によるものです。教皇フランシスコは、次のように述べています。「わたしは福音宣教省からの提案を受け入れ、二〇一九年十月を『福音宣教のための特別月間』とすることをここに発表します。その目的は、『諸国民への宣教』の意識をさらに高めること、そして教会生活と司牧活動の宣教的な変革に新たな熱意をもって再び取り組むことです。」

広島教区における取り組み

教皇フランシスコから、この「福音宣教のための特別月間」の準備を委ねられた福音宣教省の長官フィローニ枢機卿は、二〇一七年十二月三日（聖フランシスコ・ザビエルの祝日）に、全世界の枢機卿・司教に宛てて書簡を送付しました。これに基づいて、日本の司教団からも「福音宣教のための特別月間」の準備に関するメッセージがまもなく公表される予定です。これらの文書を踏まえて、広島教区においても、福音宣教に向けた具体的な取り組みを検討しなければなりません。幸いにも広島教区においては、二〇一八年度の「教会へのチャレンジ」のサブテーマである、「福音を伝える使命」をよりよく生きることができるように、いくつかの取り組みを始めていました。わたしたちは、これらの取り組みを継続して、二〇一九年度の「隣人に仕える使命」および「福音宣教のための特別月間」の取り組みにつなげていきたいと思います。

広島教区民が一丸となって歩んで行くために

二〇一八年十二月八日に開催された「教区宣教司牧評議会」において、わたしは、上述した流れを踏まえて、広島教区という「神の家族（信徒、奉献者、修道者、司祭、司教）」が、これからの歩みのために、ともに祈り、考え、分かち合い、より重要なことを選択していくことができるように、二〇一〇年を最後に途絶えていた「教区代表者会議」の開催を提案し、賛同をいただきました。しかし、二〇一九年十月の「福音宣教のための特別月間」に合わせて、「教区代表者会議」を開くことはスケジュール的に無理があります。教皇フランシスコが、二〇一九年の十一月末ごろに来日される可能性があるからです。そのために二〇一九年十月から一年かけて徐々に準備を進め、二〇二〇年十一月二十三日に「教区代表者会議」を開催することを目指して、具体的なロードマップを検討していただくことにしています。二〇二〇年の「教区代表者会議」の主な目的は、二〇二三年に祝われる「広島教区創立百周年」のあり方を検討し、また同時に百周年後の広島教区の方針・優先課題などをまとめ、新たな教区の目標・ビジョンを打ち出すことです。

「出向いて行く教会」を目指して

「福音宣教のための特別月間」に向けて、また、その時から具体的な準備が開始される「教区代表者会議」（二〇二〇年開催予定）に向けての指針となるよう、教皇フランシスコの使徒的勧告『福音の喜び』（二四）の一部を引用させていただき、結びに代えたいと思います。

「出向いて行く教会は、宣教する弟子たちの共同体です。彼らは、率先する人、かかわる人、寄り添う人、実りをもたらす人、そして祝う人です。……福音宣教する共同体は、主がイニシアティヴをとり、先にわたしたちを愛してくださったこと（一ヨハネ四・一〇）を知っています。だから、その共同体は、前進し、恐れることなくイニシアティヴをとり、行って遠くにいる人を探し出し、疎外されている人を招くために往来の真ん中に立つことができるのです。その共同体は、いつくしみを示したいという尽きない望みを抱いています。――それは天の御父の無限のいつくしみと、その力が及んだことを自らが体験した実りです。」

教会の「すべての人のために祈る使命」→「福音を伝える使命」→「隣人に仕える使命」と重層的に不可分につながっている教会の使命をよりよく生きることができるよう、ともに手を取り合って進んで行きたいと思います。今年もどうぞ、よろしくお願いします。

平和の使徒推進本部から

広島教区では、「教会へのチャレンジ」の三年目（二〇一九年度）から「社会へのチャレンジ」の三年間（二〇二〇年四月～二〇二三年三月）の旅路へと向かうことになります。この三年間のサブテーマについて、二〇一八年十月

に、蒜山で行われた司祭研修会において、三年間かけて行われる「社会へのチャレンジ」の年間サブテーマをどうするか、ということを起点に、集まった司祭団が百周年を迎える広島教区の未来を見据えながら、六つのグループに分かれ、「こんな教区であってほしいという夢とビジョン」を語り合いました。

その中で、①小教区の活動の良さを活かし支えていくような教区、②喜びがあり元気で人々に愛を証しする共同体、③現実主義に陥らず、神に向かう希望と理想を掲げていく教会、④外国から来た人々、あらゆる人々を迎え入れる「多様性の一致」を証しする教会、⑤霊性の深みから社会へと出かけて行く教会、さらに具体的な提案をも含む（キリスト教の視点から作られた広島平和資料館、大地との共生を学べる学習・体験センターの創設）など、有意義な意見が分かち合われました。白浜司教と「平和の使徒推進本部」は、司祭団のこの提案を大切にしながら、同時に信徒の中でも、同じような分かち合い、夢の語り合い、ビジョンの共有がなされ、対話のうちに、「社会へのチャレンジ」の三年間が充実したものとなることを望んでいます。

二〇二〇年四月から始まる「社会へのチャレンジ」の三年間は、教皇フランシスコが出された回勅『ラウダート・シ』の呼びかけに応える形で、そのメッセージを基調に置きながら、具体的な取り組みをおこなおうと考えています。『ラウダート・シ』で呼びかけられている回心は、人間の生を成り立たせている根本的な三つの関わりにおいて和解していくこと、つまり①隣人との和解、②大地との和解、③神との和解、です。そのような主旨に沿いながら、これまで「司祭研修会」（二〇一八年十月二十四日）、「教区司祭評議会」（二〇一八年十一月六日）、「教区宣教司牧評議会」（二〇一八年十二月八日）を経て提案されている「社会へのチャレンジ」の三年間のサブテーマは、「いのち」・「環境」・「平和」です。蒜山の司祭研修会後の司祭評議会においては、この三つのサブテーマを用いていく方向性を確認しましたが、社会へのチャレンジは、信徒一人一人が置かれている現場からなされなければなりません。そのために、信徒一人一人から湧き出てくる考え・取り組み・生活に呼応しながら、「社会へのチャレンジ」に取り組んで行きたいと考えています。さらによいと思われるアイデアやご意見がありましたら、それを生かし、包括し、反映していきたいと思います。次回二〇一九年六月上旬の「教区宣教司牧評議会」に向けて、五月末日までに平和の使徒推進本部へ、ご意見をお寄せいただければ幸いです。今後、教区や各小教区の現場で何ができるのかについて、活発な分かち合いや勉強会が行われることを期待しています。

（文責　中井淳神父）

蒜山での司祭研修会における「社会へのチャレンジ」についての分かち合い（要約）

二〇一八年十月の下旬に蒜山で行われた司祭研修会の最終日は、二〇二〇年度から始まる社会へのチャレンジについて話し合われました。六つのグループに分かれ、二〇二三年に一〇〇周年を迎える広島教区が、どのような教区になってほしいのか、夢とビジョンを分かちあいました。その分かち合いの豊富な内容を要約することは難しいのですが、その時間の司会を担当した者として、要点を報告することで、信徒の方々のこれからの話し合いと実践の一つの材料として使っていただければと思います。

新しいことを始めるにしても、それは過去を感謝のうちに振り返ることが大事であるということが言われました。これまでの六年間のチャレンジでどのような「時のしるし」を与えられたのか、恵みが与えられたのかを振り返る時間を取ることも大事です。

「多様性の一致」ということが多くのグループから出されました。滞日外国人の方々がますます増えていく今日、多国籍、多文化の人々と共生していく教会という姿が、日本の社会において証となっていくでしょう。そのために、私たちはどのように開かれ、人々を迎えていかなければならないのかを考えていかねばなりません。

「明るく、喜んでいる教会」は一つのキーワードでした。皆が率先して喜んで愛に生き、奉仕する教会。そのためにも、霊性の深みが必要であるという指摘がありました。信仰の深みから喜びがあふれて、そして社会活動へと向かい、その出会いのうちにイエスに励まされる、そのような「喜んでいる」共同体にならなければなりません。

「小教区の歩みを支える教区であってほしい」ということも言われました。教区本部からテーマや行事が投げられるのではなく、小教区を超えた大きな視野を

持ちながらも、小教区の歩みを活かして行けるようにコミュニケーションを取りながら、現場の声とそこから出てくる活動を大切にしていくということが求められていると思います。そうすれば、具体的な実現目標のはっきりした取り組みとなっていくのではないでしょうか。

何よりも「夢を描く」ことは大事です。「神は共に夢を見てほしいと願っています」と教皇フランシスコは教えています。現実主義の中に埋没するのではなく、神の夢であるならば実現していくという信仰からのチャレンジをしてゆきたいものです。分かちあいの中では、具体的なものとして、姉妹教区の釜山教区から学び、そこで実践されている環境学習センターのようなものを広島教区にも設立する、キリスト教的視座を持った平和資料館を他教派と協力して作る、といったアイデアも出されました。

どうぞ信徒の皆さんも、以上のような司祭たちの夢とビジョンの分かちあいを参考になさって、それぞれの思いをわかちあい、夢と希望をもって、社会へのチャレンジへ、そして広島教区一〇〇周年へと向かって行けますように。

（文責　中井 淳 神父）

教区の動き
平和の使徒推進本部

【二〇一八年度（第二回）広島司教区宣教司牧評議会開催】

去る十二月八日(土)、二〇一八年度第二回広島司教区宣教司牧評議会(以下、教区宣司評)が、広島カトリック会館多目的ホールで開催され、白浜司教、司祭、修道者、信徒の二十五人が出席した。

教区宣司評は、白浜司教の挨拶と祈りから始まった。「今日わたしたちは無原罪のマリアの祝い日を過ごしています。聖母マリアの取り次ぎを願いながら祈りましょう。教会へのチャレンジの二年目『福音を伝える使命』を振り返る年度にあたり、教区ではカテキスタの養成が始められました。また聖書の通読や書き写しのキャンペーンも実施されています。これから、神の福音に促されて、来年度の『隣人に仕える使命』の具体的な取り組み、そして社会へのチャレンジの三年間のテーマ、方向性についても話し合うときに来ています。更に、教皇フランシスコ来広の準備もそろそろ開始する必要があります。皆様の意見をお願いします。」この挨拶に続き、次のことが話し合われた。

議題は、まず教会へのチャレンジの三年目、来年度の「隣人に仕える使命」に向けて、広島教区内におけるボランティア活動グループについてのアンケート実施の提案、教区内のボランティア団体を一つに結ぶための事務局としての「カリタス広島」の活動再開の提案があり、今後、平和の使徒推進本部を中心に、どのような体制で進めていくか検討していくことにした。続いて「社会へのチャレンジ」(二〇二〇年～二二年度)の三年間のサブ・テーマについて話し合われ、平和の使徒推進本部からの提案

①二〇二〇年度『いのち』
②二〇二一年度『環境』
③二〇二二年度『平和』

に関し、評議員の賛成多数で可決した。同時に評議員からは、「社会へのチャレンジ」が、三番目のチャレンジであることを意識して今まで積み上げてきたことを踏まえて歩んでいけるよう三つのテーマを掲げる際、丁寧な解説を提示して欲しいと要望があった。

次に、広島教区創立百周年とその後の教区の方向性について、検討していくために白浜司教から次のことが提案された。

①教皇フランシスコの意向により二〇一九年十月が「宣教のための特別月間」に設定された。この流れで、当月に「広島教区代表者会議」の開催を宣言し、一年間をその準備の期間にしたい。

②二〇二〇年十一月二十三日に「教区代表者会議」を開催したい。代表者会議開催は、創立百周年のあり方を検討し、それ年以降の広島教区の方針や優先課題などをまとめ、新たなビジョンを示すことを目的とする。

これに関しても、評議員の賛成多数で可決した。今後、顧問会等で協議し調整

教区宣教司牧評議会の様子（多目的ホール）

するが、各地区でも日程を意識した取り組みを行って欲しいと白浜司教からの要望があった。

教区宣司評の後半は、教皇フランシスコの来広に向けての受け入れ準備開始、世界平和記念聖堂保存活用委員会からの報告、各地区・ブロックからの報告、出席した評議員から色々な報告、その他諸連絡があった。

以上のことが話し合われ、祈りと祝福のうちに三時間半の教区宣司評を閉会した。

意見や要望などは、平和の使徒推進本部まで。

ファティマ巡礼記

幟町教会　藤井 隆典

白浜司教様は、二〇一八年十月十三日ファティマでロザリオの聖母の大聖堂の献堂記念ミサの司式をされました。このミサの様子は世界に同時中継されましたが、その四十名の巡礼団に私と妻も参加させていただきました。

一〇一年前ポルトガルの片田舎で三人の牧童の前に聖母マリアが出現されました。第一次世界大戦のさなか人間同士が殺しあう罪を嘆き、地獄のありさまを三人に見せて「罪びとを救うため、祈りと犠牲を絶え間なく捧げるように」と言われました。地獄を見た後のひきつった三人の顔が写真にとどめられています。三人の証言はみんなに信じてもらえず、非難を浴びました。四度目の出現予定の八月十三日には牢屋に入れられました。十月十三日、七万人もの人々は太陽が狂ったように回転する様子を目撃しました。それを見ている多数の人々の写真が新聞に載っています。

ファティマ巡礼の参加者一同

無邪気な三人の牧童は、このことがなければ一生羊飼いで終わったかも知れませんが、以後生活が一変しました。三人はお昼の弁当を我慢して貧しい子供たちに分け与えました。育ち盛りで、毎日羊と野山を歩き回る彼らにとっては大きな犠牲だったでしょう。

二〇一七年五月にフランシスコ教皇はフランシスコとジャシンタの二人を列聖されました。ルチアは絶え間ない人々の質問から逃れるため、ドロテアン修道院にかくまわれ二〇〇五年九十七歳で亡くなるまでこの奇跡を証言しています。これらの出来事はつい最近のことです。

十月十三日のミサ（入堂）の様子

私たちはこの地に立ち、本当に聖母マリアが出現されたことを実感しました。そして今も絶え間なく私たちを見守り、広島に住む私たちが平和への努力をするよう促しておられるのだと感じることができました。

ポルトガルの放送局ＤＮ社による白浜満司教へのインタビュー

司教は、世界平和のための祈りの必要性、核の脅威に対する自らの使命、そしてポルトガル国民との連帯についてＤＮ社（ポルトガルの放送局）に語った。

「私は日本の市民として、日本のカトリック信者として、ポルトガルの文化に触れ、感謝の気持ちにあふれています。」

Q．広島のカトリック信者にとり、ファティマはどんな意味があるのでしょうか？

A．広島は原子爆弾によって破壊された最初の都市です。（聖母が出現した）牧童たちは、世界平和のために祈るよう求められていました。最初の被爆都市として広島のカトリック信者は、平和のために祈り、活動することが使命であると思っています。平和は、神からの贈り物ですから、平和が全世界に及ぶよう私たちは祈り、活動しなければなりません。

Q．ファティマは、日本のキリスト信者にとって特別な場所なのでしょうか？

A．ファティマとルルドにおける聖母の出現は、日本のキリスト信者にはよく知られており、特別な巡礼地になっています。世界平和のために、祈りをささげようと多くの日本のキリスト信者は、ファティマやルルドに向かいます。信者たちは、平和のために何かしなければならないと鼓舞されているのです。特にファティマにおける聖母の出現では。世界平和についてのメッセージが、よりはっきり伝えられているからです。

（ＤＮ社ＷＥＢサイトより　翻訳：藤井 隆典）

広島司教区 災害サポートセンター
西日本豪雨の被害 状況と対応

広島県内の被害状況と対応について

広島地区では八月から「くれ」（呉教会）、「みささ」（三篠教会）、「のぼり」（幟町ラサール会館）の三ヵ所でボランティアの方々に無料で宿泊していただける宿泊所を運営してきました。同時に、広島地区青年有志を中心として小屋浦地区を中心に各方面へボランティア活動を行ってまいりました。原則として各宿泊所の宿泊者はそれぞれの社会福祉協議会が行っているボランティア活動に参加された方々が主になります。特に「くれ」はボランティアの方々の問い合わせが殺到し、百名以上の方々が宿泊され、連泊された方も多く、呉市のボランティア活動に積極的に関わる事ができました。同時に呉市のキリスト教牧師会がインマヌエル教会で運営していた奉仕活動にも関わり、エキュメニカルな活動の一端を担う事が出来ました。

ビブスを着用しての
ボランティア活動の様子

宿泊所「のぼり」は九月いっぱいで閉鎖となりましたが、「くれ」と「みささ」は十一月いっぱいまで運営し、百数十名の方々に利用して頂き、社会福祉協議会が行うボランティア活動との連携を保ちながら幅広く活動することができました。

一方で、カトリック広島地区青年有志による諸々のボランティア活動は現在も継続中で小屋浦を中心としながらゆっくりとしたペースで住民の方々と関わりを保っています。十月以降、大まかな土砂掻き出しなどは一旦落ち着いていますが、現在は炊き出し活動や地域行事の支援、また分かち合いや関わり合いを通しての心のケアに活動をシフトしています。災害で失ったものは決して少なくなく、それぞれが痛みや苦しみを抱える中で何とか日常を取り戻すための奉仕に尽力しています。

クリスマス会（小屋浦）

ある外国籍の信徒の方は様々な理由から永らく教会を離れてしまっていましたが、今回の災害を通して教会との関わりを持つきっかけとなり、災害が落ち着いて以降、毎主日のミサにあずかる事が出来るようになりました。私たちの小さな活動が家族の理解を得るきっかけになったようです。また十月には、小屋浦の復興祭りや、バーベキュー大会、十二月にはクリスマス会がありました。広島地区青年が関わっていたボランティア活動の一段落を機に行われたものでした。住民の方々の輝くような笑顔が印象的で私の方が力付けられたような気がします。その時、一人の女の子が妹と一緒に手伝いを買って出てくれました。とても明るく、一緒にお祭りを盛り上げようとしてくれているようでした。無邪気で、奔放で、底抜けに明るい笑顔が印象的な姉妹でした。休憩しているとき、ある方が教えてくれました。「あの子達のお母さんはね、土砂に流されて・・・。遺体は見つかったんだけど・・・。」その姉妹は決して、辛い悲しみを乗り越えた訳ではありません。でも笑顔でいることで悲しみに立ち向かおうとしているのです。多くのものを失いながらも、今できる精一杯のことを子供たちなりに、一生懸命チャレンジしているのです。そうすることで、次の一歩が踏み出せるから。

私は自分の無力さを痛感しながらも、一人のキリスト者として何が出来るのか自問していました。単純に慰めの言葉をかけても、それは安っぽい言葉に過ぎないものになってしまいます。私たちが出来ること、それは何かを与えたり、慰めること、心を癒すことでもありません。ただ共感すること、共に笑顔でいることだけです。“私たち”が何かをしてあげたり、与えたりするのではありません。ただ立ち上がろうとする人々と共に立ち上がるだけです。そこにキリストが働くのです。

私たちは困難の中にいる人々に無関心であってはなりません。それは神の愛の業に反する事です。共に苦しみ、共に悲しみ、共に喜び、共に笑い、共に歩む。イエス様が人となり、私たちのところに来られたのは、罪に苦しむ私たちと“共に”生きるためです。キリストが共にいて下さるように、私たちも困難の中にある人々共に歩み続けることが出来るよう祈りのうちに微力ながらも奉仕を続けていきたいと思います。

（久保　裕己　助祭）

典礼の窓 ⑥

白浜満司教

シリーズ「典礼の窓」では、白浜司教による典礼の解説を掲載します。

今回は、この紙面をお借りして、『香部屋係のハンドブック』（改訂新版）を紹介させていただきたいと思います。第二バチカン公会議は、典礼の主宰者であるキリストに奉仕するため、神の民のメンバー全体が「典礼への行動的な参加」を心がけるよう強く呼びかけています。この「典礼への行動的な参加」は、祭儀そのものへの意識的な参加や一部の役割を遂行する種々の奉仕はもちろんのこと、その準備の段階における奉仕も含まれています。各小教区で信徒の皆さんが典礼の準備に携わることができるようにという願いから、わたしは、御受難会ファミリーのメンバーで、長く福岡の黙想の家で香部屋係をしておられた齋藤賀壽子さんと一緒に、二〇〇五年に初版『香部屋係のハンドブック』を出版していました。その後、日本の教会が、教皇庁典礼秘跡省に提出していた新しい『ローマ・ミサ典礼書の総則』（第三版）の翻訳適応が、二〇一四年に認可され、翌年の十一月二九日（待降節第一主日）から、日本の教会において施行されています。これに伴い、初版『香部屋係のハンドブック』の改訂が必要になっていました。ようやく、新しい総則に基づく変更箇所を踏まえて内容を一部書き改め、昨年十月三十日付で、「教友社」より、改訂新版を出版することができました。本書を通して、信徒の皆さんが準備段階の典礼奉仕に興味を持ち、その具体的な予備知識や実践的な奉仕のあり方を学んで、香部屋係の奉仕に役立てていただければ幸いです。

重要文化財　世界平和記念聖堂

世界平和記念聖堂の追加工事による工期の延長が決まる

司教座聖堂「世界平和記念聖堂」の保存修理工事は、本年の八月まで工期が延長されることになった。当初の計画では、昨年の十二月に完成する予定であったが、地下聖堂の漏水対策や側廊の外壁からの漏水対策のために工期が延長された。

地下聖堂の床は、地面から二メートル下がった位置にあり、大雨が降ると地中に浸透した雨水が地下聖堂の壁の亀裂などから聖堂内に浸透していた。このため、地下聖堂に接する東側と南側の地面を掘り、地中に接する壁や基礎に防水工事をおこなった。また、雨水が地中に浸透するのを防ぐため、聖堂周囲の雨水排水管も点検、再整備し、水はけの改善を行った。これにより降雨が続いた時にも地下聖堂の床に雨水が浸透する恐れが少なくなった。

世界平和記念聖堂の後方、地下聖堂の防水工事の様子

なお、東側にある地下聖堂の階段は聖堂本体と構造が切り離されているため、階段の最下段に排水桝を設け、雨水が侵入してもポンプで排水できる対策を講じた。今回の防水工事では、地下聖堂の階段室や機械室などの防水対策が予算的に認められず、課題が残った。

側廊の上部にあるステンドグラス窓周辺の漏水対策は、外壁に積まれたモルタルレンガを一部撤去し、その内側にあるコンクリート壁に防水処理を行なった。取り外したモルタルレンガは、劣化が進み、再利用が困難なため、現場で新しくレンガを作成して積み直した。六十五年前の聖堂建設時に女性作業員が現場でレンガを作ったという記録があり、これに倣って工場ではなく、現場で作成した。レンガの復元には、使用する砂の粒の大きさやセメントの混入割合など左官職人の経験と技量に依るところが多かった。献堂した当時の形状を復元するだけではなく、その制作過程までも

解き明かして再現するという文化財の保存に対する建設会社の意気込みに感心している。

引き続き、献堂後に一度も交換していない老朽化した電線ケーブルの交換、照明器具の更新、ハスの花を形どったシャンデリアの修復、身廊の天井部材の落下防止工事、老朽化した重油ボイラーの撤去、聖堂内の冷暖房設備の新設と換気設備の更新が行われる。このほか、補助金の対象とならないマリア聖堂の空調設備の新設などの多くの懸案事項が残されている。引き続き、聖堂保存事業への理解とご支援をお願いします。

世界平和記念聖堂募金
郵便振替口座

口座名義：カトリック広島司教区
口座番号：01320-3-109791
＊通信欄に「聖堂保存献金」と記入してください。

マリッジエンカウンターウィークエンドへのお誘い

マリッジ　エンカウンター（ME）ウィークエンドとは、家庭や社会の中にある、様々な関わりの基礎となっている夫婦の関わりを深めていくための方法を体験的に身につける二泊三日のプログラムです。夫婦がお互いを、そして結婚という結びつきを新鮮な目で見直し、二人の将来を見つめるとてもよい機会です。また、自分たち二人と神との関係、自分たちと周囲の人々との関係をも深く見つめるひとときです。

夫婦だけでなく、人々との関わりを深めたいと思っている司祭、修道者も参加できます。MEウィークエンドはカトリックの運動です。

日時：五月四日（土・祝）二十時～六日（月・祝）十八時
場所：イエズス会聖ヨハネ修道院（長束黙想の家）
対象：夫婦（結婚年数、信者未信者を問わない）、司祭、修道者
問い合わせ：富山（福山教会）084-962-1295、坂井（観音町教会）082-507-5205

〝私はマリッジエンカウンターに大きな期待をかけています〟（聖ヨハネパウロ二世）

聖書通読・写経キャンペーン
完了者紹介

写経を完了された方
第0001号
　西本 美矢子 様（祇園教会）
第0002号
　重松 朱美 様（廿日市教会）
2018年から開催中の通読・写経キャンペーンに皆さんもご参加ください。

― 献金御礼 ―

お花代のお返しとして、世界平和記念聖堂保存修理工事へ献金をいただきました。お礼とご報告を申しあげます。

益田 眞 様（幟町教会）
故 益田 敬 様

世界平和記念聖堂保存活用委員会

JICaRM広島便り

幟町教会の「家族大会」が国際ミサへ変身

二〇一八年九月三十日の「家族大会」は、フィリピングループの発案で「国際ミサと祝い」になった。

この日は幟町教会の年間プランに「家族大会」があり例年ヨゼフ会主催のバーベキュー大会の予定でした。フィリピングループでは、二十八日に聖トマス西と十五人の殉教者を祝う日本の典礼に、来日した「初のフィリピン人」で、一緒に殉教した唯一のフィリピン人・聖ロレンソ・ルイスを特別に九月三十日に祝いたいとの願いが、同じ日とぶつかった。それで主任司祭の荻神父と教会の役員会に相談。日本人だけでなく国際ミサにして皆で祝おうと話が発展し、直ぐに聖ロレンソ・ルイスについて簡単に紹介できるスライドを作りたいと申し出るフィリピン人役員も出て、ベトナムグループにも呼び掛け、英語、スペイン語の共同祈願も入れ、ミサ後に国際色豊かな持ち寄り料理と、料理や遊びを紹介しようと素晴らしい国際ミサと祝いの食事会が実現。スライドはダブルの子が素晴らしい日本語で解説。

ここで私が感じたのは、英語のミサ、ベトナム語のミサとかと言うよりも「神の民」としての国際色豊かな「カトリックのミサ」を皆が望んでいる！多言語の聖歌や、オルガンプラス管弦楽器も入り、調理法や食材、子どもの遊び、多彩なクリスマスの飾りつけの紹介など、皆が喜んで習い、説明者も自分達の文化を誇らしく紹介。この宴に招いた聖ロレンソ・ルイスに感謝！

ミサ後に行われた集い（多目的ホール）

教区内の行事案内

■アルペ神父列福祈願ミサ

元イエズス会総長アルペ神父が帰天されて２８周年を迎えます。２０１８年７月２５日にはローマ教区において、列聖調査が開始されました。今年も同神父の一日も早い列福を祈願してミサを捧げます。

日程：２０１９年２月２日（土）
　　１３時　　列福祈願ミサ　司式　酒井 陽介 神父（聖イグナチオ教会）
　　１４時３０分　懇親会
場所：西日本霊性センター（元イエズス会長束修練院）
問い合わせ：祇園教会　電話082-874-5198

■岡山市内巡礼

西日本各地に流された浦上のキリシタン達は、１８６８～７３年迄の５年間苦難の日々を過ごされました。寒風の備前岡山の上陸の地から、鶴島移送迄の１０か月間苦しみを受けた獄屋の信徒１１７名の名残の個所を共に辿り祈ります。

日程：２０１９年２月２日（土）
　　１２時４５分　岡山南教会集合
　　１３時　　講話と祈り
　　１３時３０分　祝福を受けて出発（所要時間は、約３時間）
場所：岡山南教会、岡山教会
行程：岡山南教会→上陸地 (現・住吉宮付近)→松寿寺→中央図書館(休憩) →本行寺跡→袋町牢獄跡→岡山教会
問い合せ：岡山教会　電話 086-222-4093

■第３６回広島キリシタン殉教祈念祭

多くの殉教者を出した地、広島市西区己斐東に建立された「キリシタン殉教碑」前で祈りを捧げ、観音町教会まで十五分ほどの徒歩巡礼ののち殉教祈念ミサと講話が行われます。

日程：２０１９年２月１１日（月・祝）
　　９時３０分　殉教碑前の祈り　ノートルダム清心中高入口
　　１０時１５分　殉教祈念ミサ　司式 白浜 司教　（観音町教会）
　　１１時１５分　講話　講師 白浜 司教
　　１２時　　茶話会　ヨゼフ館
場所：キリシタン殉教碑、観音町教会
問い合わせ：観音町教会　電話 082-231-5547

地区便り

山口島根地区

＊二〇一八年教区行事「平和を創る人々の集い」祝島現地学習会と柳井教会での交流会

十月二十七日・二十八日、山口県熊毛郡上関町の島、祝島で現地学習会と柳井教会で交流会が行われました。参加は、岡山（水島教会）、広島（福山教会・幟町教会・祇園教会）、山口（光教会・柳井教会・下松教会・岩国教会・山口教会）から四十三名でした。

初日二十七日は、肥塚神父様を先頭にして祝島に渡り、まずは朝市で島の方とささやかな交流を済ませ、公民館で待っておられた祝島島民の代表 清水敏保さんを訪ねました。上関原子力発電所建設に反対し三十七年目を迎える今、それまでのことをお聞きしました。集った部屋の窓からは、美しい海、そして澄んだ青い空が広がっていました。三十七年もの活動を支える力はここから湧いてくるかと思わせるものでした。

参加者で記念撮影（場所：柳井教会）

四キロメートルキ先に予定される発電所建設反対のデモを現在も続け千三百十四回を終えたとのこと。また、一昨年八月三十日には、四千八百万円（四人に対して）もの損害賠償を中国電力から請求されていたスラップ訴訟で勝利和解が成立し、このことについて支援者の方に感謝を述べておられました。しかし、原発建設計画は止まっておらず、この六月に中止を求める緊急署名を三万六千三百三筆提出されたこと、また、漁業補償金十億八千万円は山口県漁業組合に預けることに決まった事の説明がありました。

笑顔で話しを進められる清水さんから聞こえてくるのは、難しい話しではなく、正しいと信じることを守り抜いてきた誇りと、島の自然と歴史・文化を愛する心でした。

次の二十八日は、柳井の町並みを歩いた後、柳井教会で肥塚神父様司式のミサに授かりました。総勢二十五名ほどでしょうか、聖堂が集まった人で一杯になりました。

ミサ後は、柳井教会で前日から準備されたカレーライスやデザートなどを前に、交流会を行いました。初めての方とも言葉を交わし、また自己紹介で知る他教会の信徒の方のありように聖徒の交わりを体で感じる貴重な時となりました。また、お会いしましょうね、と声を掛け合ってそれぞれの帰途につきました。

（山口教会　貞方 賜枝（たまえ））

海峡からの風 51
下関労働教育センターだより

ノーベル平和賞のメッセージ

ノーベル平和賞受賞者のムクウェゲ医師のドキュメンタリー映画を観た。自らの命を削っても、理不尽に脅かされ奪われる命と人生に対峙する彼の生き様を目指したいと思った。

私にとってノーベル平和賞と言えば、反アパルトヘイト運動に関わっていた故のネルソン・マンデラ、東ティモール独立支援運動時代のベロ司教とラモス・ホルタの授賞が想い出深い。前者は「功労賞」だが、後者はインドネシアに侵略最中のメッセージを込めた授賞。国連でのインドネシアの侵略非難決議に反対票を投じ続けた日本政府は、受賞後来日したラモス・ホルタ氏に会うことを拒んだ。

同様にメッセージ性のある授賞は多く、中でも核廃に関連は何度もあり、昨年の核兵器廃絶国際キャンペーンに対してやはり日本政府は門前払いをした。

他にも今年海洋プラスチック憲章への署名を拒む等、日本政府の対応は実に首尾一貫しており、経済優先・国益優先・日米関係優先であって、命や人権や環境などは二の次。

今年のムクウェゲ医師とナーディーアさんは戦争・内戦における性暴力に対する厳しい批判を訴えている。自らの戦争時性暴力加害、慰安婦問題に対する政府の態度を見る限り、今回の授賞に対する日本政府の対応は想像に難くない。韓国が仮想敵国北朝鮮と頭越しに仲良くしたものだから、「強制徴用」への司法の毅然とした判決やレーダー照射問題をことさら大きく取り上げ、武器商人アメリカからの高い買い物の正当性を取り繕う。

下関労働教育センター所長、中井淳神父は「東アジアの和解と平和」が自身の使命でありビジョンであると語る。その和解と平和の実現を最も阻害する要因の一つが日本政府と言う現実。その政治を許す私たちの責任は重い。

二〇一九年が希望に満ちた一年となることを祈る。

（大城　研司）

広島地区

＊広島地区教会学校リーダー会研修会

二〇一八年度広島地区教会学校リーダー会研修会「信仰継承～神さまに愛されているから～」が十一月二十五日（日）幟町教会で行われた。講師は白浜司教様。参加者は広島県内、出雲市から子ども・大人合わせ百三十人。全体で「クリスマスについて」のお話を聞いた後、大人は続けて教区の教理教育の新指針やカテキスタ養成について説明を受け、子ども達は幼稚園ホールでレクを楽しんだ。

岡山鳥取地区

＊日本の死刑制度を考える集い

死刑問題に関し、十二月に二つの行事が岡山教会で行われました。八日（土）は、「山下貴司法相地元岡山で死刑について考える集い」、DVD「赦し、その遙かなる道」とシンポジウム（元法務大臣江田五月、弁護士中村有作、同安田好弘の対談）。十三日（木）には「叫びたし寒満月の割れるほど」（福岡事件から再審・恩赦・死刑を考える）、講師に、古川龍樹師（生命山シュバイツアー寺）。いずれも死刑制度が残る数少ない国である日本の後進性が明らかにされる話。私たち信者にとっては、「全世界で死刑が廃止されるために意を決して努力します」とカトリック教会のカテキズム二二六七番が改定されましたが、時宜にあった内容でした。特に「赦し、その遙かなる道」は感動で揺さぶられる実話です。是非ご覧ください。

伯雲協働体

＊平和祈願ミサ～永井隆博士をしのんで～

十一月二十三日（金）十時から、伯雲協働体（出雲、米子、松江三教会）の活動の柱となる行事、「平和祈願ミサ～永井隆博士をしのんで～」が雲南市の三刀屋文化体育館アスパルで開催されました。

司教様をはじめ六名の神父様方によるミサに続き、「永井隆博士の人生」の映像を見た後、グループに分かれて分かち合いを行いました。

社会も人間も〝心の感度〟が低下してきている昨今、永井隆博士の人生を通じて「仕える者としての働き」「平和への願い」を再認識出来た時間となり、温かな心にて散会しました。

（松江教会　裏辻るみ）

小グループに分かれて昼食をとりながら分かち合いを行った

広島教区一粒会

神学科二年　三宅　仁孝（まさのり）　神学生

広島教区の皆様、倉敷教会出身の神学生のパウロ三宅仁孝と申します。神学校に入学して六年が終わろうとしています。途中で休学などもありましたが、少しずつ司祭への道を進んでおり、現在は神学科二年生になっており、福岡キャンパスに住んでおります。この六年間で感じたことは、人との出会いと関わりがとても大切だということです。神学校に入る前も感じていた事ではありますが、今このことを改めて強く感じています。

最初に思い浮かぶのは、教会の皆様のことです。教会でお会いした時に、「頑張ってね」とか「お祈りしているよ」と言っていただいたことは、神学校で生活していてだらけそうになった時に頭に浮かんできて、もうひと頑張りするぞという気持ちを沸き立たせてくれます。

色々な神父様との出会いも、日々の刺激となっています。神学校に入学し、広島教区だけでなく、色々な地域の神父様と出会い、それぞれに色々な考えを持っている方がいて、それでも同じ神様の方を向いて奉仕している姿を見ると、自分も頑張って勉強をして、しっかりと奉仕していけるようになろうと、思いを再確認しています。

そして、一緒に学んでいる神学生との出会いもとても大きいと感じています。ともに司祭を目指し、学んでいる仲間がいるからこそ、神学校に入ってからの毎日を乗り越えてこられました。休学中に復学するかを悩んでいる時に、戻るという決断をする事が出来た要因の一つもここにありました。ここにあげた以外にも、多くの出会いがありました。悩んでいる時に背中を押してくれた人がいました。昔から関わりのある人に励まされたこともありました。この多くの出会いには、神様の働きがあったのだと、日々の祈りの中で感じています。私は、隙あらば手を抜こうとしてしまいますし、楽な方へと進んでいこうとしてしまいます。そんな中で神学生を続けてこられたのは多くの人との出会いと、出会わせてくださった神様のおかげです。来年度から神学校の制度が変わっていき、悩んだり、苦しんだりすることが出てくるかもしれません。それでも、少しずつ前に進んでいけるように、皆様との関わりを大切にしていきたいと思います。

青少年の活動

第三十六回 NWM in 広島のお知らせ

日時：二月九日～十日
場所：ノートルダム清心女子大学 一宮校舎

▼NWM（ネットワークミーティング）とは？

カトリックの青年、青年活動を支える司祭・修道者が自由に集まり、カトリック教会の青年活動が直面している諸問題や、各自の信仰について分かち合う中で交流を深める場です。また、いろいろな地域で活動する青年と出会い、情報交換を行う目的もあります。NWMは一年間に二回（二月・九月ごろ）に開催されています。つながりが教区を超えてさらに広がり、全国各地の青年たちが一つに集まる、とてもステキな場です。

▼テーマは「いってかえりぃ」

「いってかえりぃ」という言葉は広島弁で「行って無事に帰ってきてね」という優しい心遣いが込められています。神様と私たちの関係と同じような気がしています。私たちは、神様から美しい心（花の種）をいただいています。今回のNWMでは、その心を花にして、多くの人と出会い、沢山のお恵みを感じることで、その人にしかないオンリーワンの花が咲かせられることを目的に準備しています。広島教区での開催は七年ぶり四回目です。NWMを機に、多くの青年たちとの出会いや繋がりを通して、益々広島教区が若者のパワーで発展しますように。どうぞみなさま、お祈りください。

（代表 中塚汐音）

第53回 中国ブロックカトリック高校生大会

日時：3月24日(日)～27日(水)
場所：ノートルダム清心女子大学 一宮校舎
対象：中学3年生～高校3年生
申込締切り：3月8日(金)
詳細は各小教区配布の案内をご覧ください

ひと滋〈99〉

「災いから希望へ」

倉敷協働体助任司祭・淳心会
レイモンド神父

皆さんが既にご存知の通り、二〇一八年の漢字は「災」と発表されました。昨年は災害の被害が多かったです。本当に、自然災害の脅威を感じた一年でした。「西日本豪雨、北海道胆振東部地震、大阪府北部地震」。これらの被害によって、私たちの兄弟姉妹が、命や家や大切なものを失ってしまいました。光のないトンネルに入ってしまった様です。「何故その様なことが起こったのか。何故神が災いを認めたのか。」と辛い声で被災者がテレビで叫んでいました。

たとえば体の一つの部分が病気になると、体全身も、痛みを感じるものです。同様に、私たちも兄弟姉妹が苦しみをおぼえ、日本全社会が痛みを感じている中、兄弟姉妹を立ち上がらせるために心を込めて祈り、今も力を尽くして努力しています。神は、長年にわたり悩み苦しみながら、闇の中を歩んでいたイスラエルの民に大きな光、救い主を送ってくださいました。同様に、私たちもどんな災いや辛いことが起ころうとも、信仰によって希望を持つなら、神が豊かな力を与えてくださるはずです。

クリスマスを迎えた私たちが、苦しみ悩む中でも心を捨てず、インマヌエルであり神の子である世の光に心を向けましょう。何故なら、私たちそれぞれの心、私たちの間、人生の中にお生まれになったイエス様が、この世の試練やチャレンジなどで落ち込んでいる人に希望を、暗いトンネルに入ってしまった人に光を、嘆き悲しんでいる人に喜びと幸せをもたらしてくださるからです。

私たちは災いに閉じ込められると、神の手の力を見逃すことになりがちですが、トンネルの終わりには光があります。主イエスはそのトンネルの終わりの光で災いを希望へと変えてくださいます。頑張ろう！

風紋

二〇一八年。七月の西日本豪雨災害は広島教区内に大きな被害をもたらした。亡くなられた方、被災された方へお祈りするとともに、多くのボランティアの方々、教区災害サポートセンターの活動に感謝したい。二〇一九年。フランシスコ教皇の来広に心おどる、よい一年となりますように。（かぴ）